

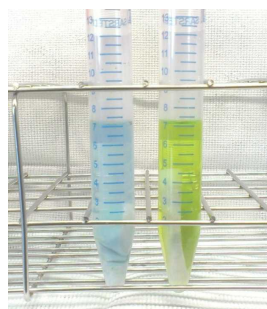
アオコ情報の発信

～ アオコの発生状況の調査から公表まで ～

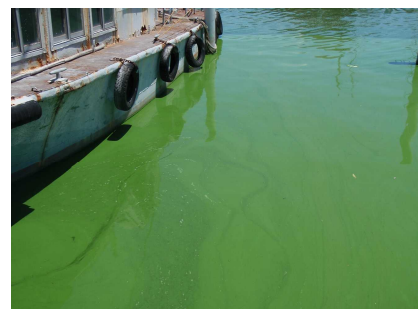
平成23年のアオコの大規模発生を受けて、霞ヶ浦環境科学センターでは、夏期に「アオコ情報」を発信しています。「アオコ情報」では、現地調査により把握したアオコの現在の発生状況を、ホームページで公表しています。

アオコの量を把握するには

アオコ情報では、アオコの現存量をフィコシアニン濃度で表しています。フィコシアニンとは、植物プランクトンの中でも藍藻類に含まれている青色の色素です。夏季の霞ヶ浦では、フィコシアニンの量は藍藻類の量と比例関係があります。このため、フィコシアニンを測れば、アオコの原因となる藍藻類のおおよその量を把握できます。



(左)フィコシアニン
(右)クロロフィル

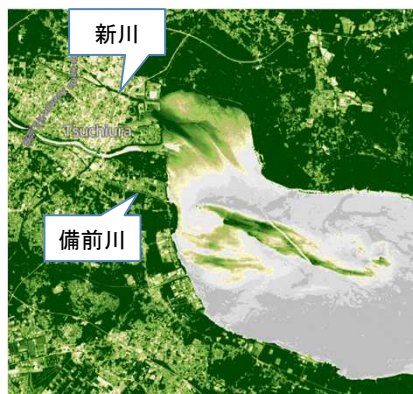
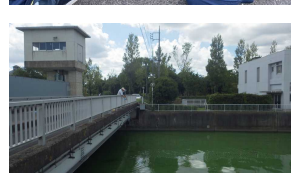


土浦港で見られたアオコ

アオコの発生状況の調査

霞ヶ浦環境科学センターでは、アオコが発生しやすい6月から9月の間、湖内(西浦・北浦・常陸利根川)については1カ月に1回、河川(新川・備前川)については1週間に1回の頻度で、アオコ発生状況の現地調査を実施しています。船や橋の上から採水し、実験室に持ち帰ってフィコシアニンの量や、アオコが増殖する際の栄養となる窒素・リンの量を測定して、現在の湖内や河川の状況を把握しています。

また、衛星画像を用いて、湖内のアオコ分布状況の把握に努めています。

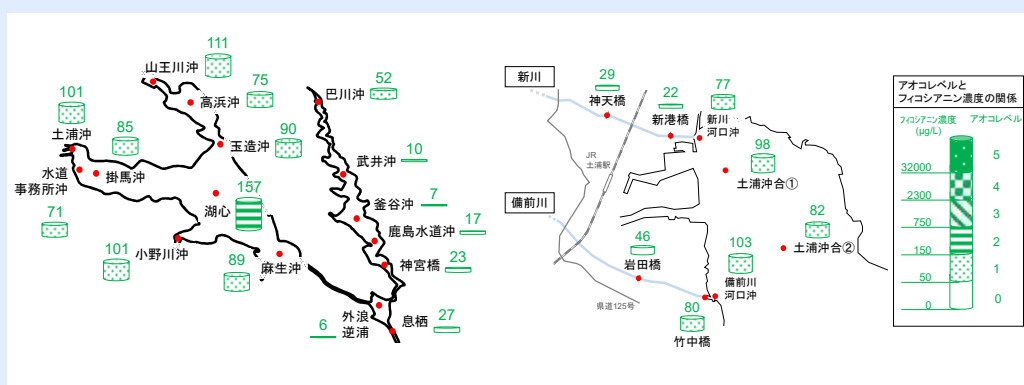


(左)調査の様子。(右)アオコ発生時の、霞ヶ浦の土浦入湾奥部の衛星画像(NDVI)。濃い緑色に見えるのがアオコや植物の部分。

※Contains modified Copernicus Sentinel data 2024 processed by Sentinel Hub.

「アオコ情報」の発信

アオコ発生状況の現地調査結果は、「アオコ情報」として、調査が完了次第、アオコフェンスの設置などの対策をする国・県・市に提供しているほか、センターのホームページでも公表しているので、誰でも見ることができます。



令和7年にアオコ情報で発表した、地点ごとのフィコシアニン濃度
(左:8月5日の湖内、右:8月7日の河川)